

中世禪林における重陽の喫茶文化

——茱萸茶・菊花茶をめぐって——

館 隆 志

一 はじめに

本論では、日本の中世禪林で重陽に際して行なわれた喫茶文化である、茱萸茶と菊花茶について諸史料を通して解明することで、中世禪林における文化の受容過程の一端を明らかにしたい。また、同じような習俗である端午の菖蒲茶との比較を行ない、重陽の喫茶文化の実体を探るものである。

重陽は九月九日の節供であり、中国を由来とするもので、陽数（奇数）である九が月と日ともに重なることを尊んで嘉し、陽数の九が重なることから重陽とも重九とも言う。また、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日などの重数節日の成立は、二世紀末頃と考えられている〔池田一九八六〕。

重陽の説明によく用いられるのが、武徳七年（六二四）撰述の『芸文類聚』巻四歳時部の九月九日条収録の魏文帝（曹丕、一八七—二三六）の「書」であり、これによって、二世紀末頃には九月九日の節供が成立していたことを裏付け、陽数

の九の月日の重なりを尊んだことが知られる。

重陽の習俗としては、この日には、高い場所に登る習俗があり、宴が催され、茱萸を用いる習俗、菊花を用いる習俗、重陽糕（だんご）を食する習俗などがあつた。重陽糕は、地方によっては糕ではなく粽が食された。茱萸は赤い実のなる植物で、はげしい赤い色や香りで辟邪するとされた。また、茱萸と菊花には延年の呪術的な効能が知られ、酒とともに飲むようになるのは、このような事情にもよるのだろう。

このうち、唐代頃までの茱萸を用いる主立った習俗に、頭に茱萸を戴く習俗「茱萸戴頭」があり、他にも茱萸を入れた袋を帯びる習俗「茱萸囊」が行なわれた。また、唐代は酒に浮かべて飲む習俗「茱萸酒」もあつたが、あまり一般的ではなく、主流は菊花を酒に浮かべて飲む「菊花酒」であつた。

しかし、宋代になると「菊花酒」の習俗は廃れ、「茱萸酒」が隆盛するようになり、宮廷行事としてわずかながら残っている他は「茱萸酒」が基本となつていった。菊花はそれを頭に

戴く習俗「菊花簪頭」が宋代のみに流行した。また、宋代以降は菊花を視覚的に鑑賞する「賞菊」が行なわれた。

二 宋代の禪林における重陽の受容

禪籍における重陽の記事としては、汾陽善昭（九四七—一〇二四）が上堂に際し述べた「重陽九日菊花新」（大正蔵四七・五九七b）があるが、内容からは重陽に行なわれた上堂であったかは見極め難い。一方、『列祖提綱録』巻四一「重陽日提綱」に、真浄克文（一〇二五—一一〇二）をはじめ北宋代の禅僧による重陽の上堂や示衆が記録され、重陽の上堂などは北宋代から始まっていたと考えられる。ほかに、崇寧二年（一一一三）成立の『禪苑清規』には、特別な「齋」を設ける日の一つとして「重九」（重陽）が挙げられている。

南宋代からは、茱萸茶を飲み、重陽糕（黄栗糕・黄栗粽）が食されていたようだ。茱萸茶は「茱萸酒」という民間習俗が禅林に受容されたものであり、酒を茶に変えて、茱萸を浮かべて飲むのである。そして、味は「苦渋」（続蔵一一一・四四三b）であったという⁽²⁾。

また、重陽糕は多くは黄栗糕や黄栗粽とあり、黄色い栗が中に入っていたらしい。『列祖提綱録』引用の真浄克文の重陽の上堂に、「飽餐黄栗糕」（続蔵一一二・三八六c）とあり、北宋代にはすでに始まっている。文献上、禅林における端午

の粽の初出も真浄克文であることは興味深い「館二〇一八」。ただし、端午の菖蒲茶と粽、重陽糕（粽）が北宋代にすでに始まっていることからすれば、重陽の茱萸茶も北宋代にはじまり、南宋代にも受容されたと考えられ、さらに元代にも継承された。元代の『勅修百丈清規』巻七「月分須知」（大正蔵四八・一一五五a）に、重陽の上堂と茱萸茶が清規に記されている。ただし、これより後の時代の中国では、重陽の上堂以外はほとんど継承されなかったようで、茱萸茶も重陽糕（粽）もほとんど記録にみられない。

三 日本における重陽の受容

荣西（一二四一—一二二五）の記述に重陽に関するものがないので、荣西の時代の受容状況は不明であるが、道元（一一〇〇—一二五三）の『知事清規』（大正蔵八二・三三七a）では、『禪苑清規』に基づいて、特別な「齋」の日に重陽を含めている。さらに、『正法眼蔵古鏡』が仁治二年九月九日に、『正法眼蔵身心学道』が仁治三年重陽日に興聖寺で示されているので、重陽に「示衆」していたと思われる。それゆえか、道元の語録には重陽の上堂は収録されていない。しかも、その後の曹洞宗の語録は江戸時代になるまで、重陽の上堂は残されておらず、瑩山紹瑾（一二六四—一三二五）の『瑩山清規』にも重陽に関する記事はない。

中世の臨済宗の受容状況としては、蘭溪道隆（一二二一—一二七八）の語録には重陽の上堂（大正蔵八〇・六二）と推定される上堂が収録され、その後の渡来僧の語録にも重陽上堂が記録されている。日本僧の白雲慧暁（？—一二九七）、南浦紹明（一二三三—一三〇八）の語録にもあるので、中世前期の臨済宗では基本的に毎年の行事であったのだろう。

中世の曹洞宗の語録に重陽の上堂が見られない一方「安藤二〇〇八」、臨済宗では江戸時代前期まで、重陽の上堂は受け継がれた。それらの記録に見られる重陽の習俗は、茱萸茶、菊花茶、黄栗糕（粽）である。この点、禅林における端午の受容と異なるのは、端午の場合、粽を食べる習俗はすでに日本に入っていたし、菖蒲茶の基となる菖蒲酒の習俗も日本に入っていた。端午そのものが日本ですでに受容されており、鎌倉時代に禅僧によって禅林文化として再び将来されたものである。しかしながら、重陽の菊花酒はあっても、茱萸酒も重陽糕（粽）も未だ日本に入ってきていなかった。

すなわち、鎌倉時代における重陽の禅林文化の導入は、民間における受容状況とは関係なく、新しい宋朝文化として導入されたことになるだろう。

四 重陽の喫茶文化——茱萸茶——

現在、鎌倉期禅僧の喫茶史料を収集し、訓註を付す研究を

継続しているが「館二〇一七a」、注目されるのが、茶に関する説示をする日が端午と重陽に集中していることである。すなわち、中世の日本の禅林では端午と重陽に特別な喫茶しており、往々この日に茶に因んだ説法も行なわれていた。

菖蒲茶は濃い緑の茶に菖蒲を刻んで浮かべ、飲む際には菖蒲を口の中で碎いて更なる苦さを味わい邪気を祓うものであった「館二〇一七b」。ここである菖蒲は、花菖蒲ではなく、菖蒲（ショウブ）や石菖蒲（セキショウ）のことであるが、菖蒲と石菖蒲は日本に自生し、菖蒲を用いる端午の諸習俗は日本でも行なわれていたので再現は容易であった。

一方、これと様相を異にするのが茱萸茶である。茱萸というと、日本ではグミ科の植物で果実が食用になる「グミ」として知られるが、これはいつの時代からかグミに茱萸の漢字が当てられてしまったものであり、本来は誤用である。もともと、古来より中世にかけて日本で茱萸は「シユユ」と読んでおり、あるいは呉茱萸（ゴシユユ）と呼ばれ、ミカン科の植物の一種のことであった「寺井二〇〇八」。呉茱萸は重陽の節供には必要なものではあったが、日本には自生していなかった。そのため、平安時代の宮廷行事では呉茱萸の実是中国から輸入されたものが用いられていた。

そして、鎌倉時代に、渡来僧、あるいは入宋僧を介して重陽の茱萸茶が日本の禅林に導入されたが、この事情を踏まえ

た場合、中世の日本において、茱萸茶をどのように再現できたのかについてはよくよく考えなければならぬ。

このことに興味深い示唆を与えてくれるのが、無学祖元の『仏光国師語録』巻三「建長寺語録」「重陽上堂」の「茱萸日本無」（大正蔵八〇・一四九b）という一文であり、日本には呉茱萸はなかったのである。たとえば、大休正念の『大休和尚語録』を見ると、「厨無黄栗粽、堂乏紫萸茶」（仏全九六・一一）、「厨内既無黄栗粽、堂中休点紫萸茶」（仏全九六・三九）とあって、重陽に紫萸茶（茱萸茶）が飲まれていたからこそ言葉ではあるが、上堂を行なった時の重陽では、呉茱萸が実際に無かったという状況も想定される。また、実際に茱萸茶を飲んでいた場合、その呉茱萸は、渡来僧、入宋僧がもたらしたか、別に輸入されたと理解する他はない。

いずれにしても、鏡堂覚円（一二四四—一三〇六）の『鏡堂和尚語録』巻一「建仁寺語録」の重陽上堂に「紫萸滿泛趙州茶」（五山新六・四二五）とあり、別の重陽上堂にも「紫萸釀点趙州茶」（五山新六・四三九）とある。無象静照（一二三四—一三〇六）の『無象和尚語録』巻上「淨智寺語録」に「喫了茱萸茶」（五山新六・五四五）とある。他にも鎌倉期の禅語録に茱萸茶と考えられる記事が散見されるように、茱萸茶は鎌倉時代には間違いなく飲まれていた。

この点、乾峰士曇（一二八五—一三六二）の『乾峰和尚語録』

巻四「偈頌」の「謝清拙和尚重陽惠茱萸」に「蘇州有也只聞名、道地吳萸未見形。今日応時親納祐、郝翁蓋底祝椿齡」（五山新別一・五一八）とあり、清拙正澄（一二四九—一三三九）から呉茱萸を送られ、呉茱萸の形を始めて見たと述べている。「道地吳萸」は本場の呉茱萸ほどの意であるが、茱萸の木を指すのか、房がついた呉茱萸の実を指すのか、実そのものを指すのかよく解らない。呉茱萸が粉として輸入されるのが普通であった場合、入元していない士曇が実の状態の呉茱萸を「道地吳萸」と評価し得るからである。いずれにしても、渡来僧が呉茱萸を中国から運んでいることと、日本において呉茱萸が珍しかったことは知られよう。

絶海中津（一二三六—一四〇五）の『絶海和尚語録』巻上「慧林寺語録」の「重陽上堂」に「盃裏紫萸茶泛春」（大正蔵八〇・七三四c）とあるが、別に『絶海和尚語録』巻下「偈頌」の「重陽次韻古劍和尚」では「呉地茱萸到口難」（大正蔵八〇・七五二c）とあることは印象的である。

以上のことから、鎌倉時代の禅林では、重陽の茱萸茶は始まっているが、それは輸入された茱萸を用いなければならず、簡単には飲めなかったことがわかる。しかし、宋朝の禅林独自の文化として、その後の中世の語録に見られ、江戸時代までこの禅林文化は続くこととなった。ちなみに、中国ではもとの茱萸酒は宋代以降廃れていき、禅林でも宋代以降、

ほとんど記録にはみられない。その意味では、重陽の茱萸茶は、まさしく南宋禪林文化の一つと言えるだろう。

五 重陽の喫茶文化——菊花茶——

日本では茱萸茶という禪林文化を輸入したが、呉茱萸が日本で入手困難である以上、茱萸茶を行なえなかった寺院は多かったはずである。また、大寺院であればこそ、量が必要となり、茱萸茶を行なえなかったこともある。一方、重陽に茶を飲む行為は呉茱萸がなくても行なわれたようで、重陽の日には茶に関する上堂説法が記録される例が多い。

この重陽の喫茶文化の中で、特段に目を引くのが菊花茶である。重陽には菊を使った習俗があり、唐代には菊花酒が流行り、宋代になると菊花酒から茱萸酒に変わり、菊花茶は宮廷行事として残っていたことはすでに述べた。一般習俗が流入しやすいという禪林の性質上「館二〇一八」、宋代の禪林に茱萸茶が導入されたことは理解しやすい。

一方、鎌倉時代以降の禪籍にしばしば登場するのが菊花茶である。『大休和尚語録』『建長寺語録』『重陽上堂』に「辟孽黃花浮緑茗」（仏全九六・二九）とあるように、茶に菊花を細かくして浮かべて飲むものである。緑の茶に黄色い菊の花を浮かべた、色彩豊かな茶を想像することができる。

白雲慧暁の『仏照禪師語録』『東福寺語録』『重陽上堂』の

「重陽佳節菊花開、人愛秋香浮玉盃」（大正藏八〇・三〇）は菊花茶であろう。また、東明恵日（一二七二—一三四〇）の『東明和尚語録』『東勝寺語録』に「茶杯泛菊英、一味洪人口」（五山新別二・二四）とあるように、中世禪林ではまちがいない、重陽に菊花茶も飲まれていた。

この点、中巖円月（一三〇〇—一三七五）の『東海一漚集』「己丑九月八日、微雪降詩以記之」に、「九月利根天已雪、十囲大木凍將折。茱萸日本本自無、黃菊早萎隨變滅。明日重陽一盞茶、不知何以賞佳節」（五山全二・一二）とあるのは興味深い示唆を与える。茱萸は日本にはないし、菊もダメになったので、明日の重陽の喫茶は、どのように佳節を賞したらよいのかと記している。すなわち、茱萸があれば茱萸茶、無ければ菊花茶を飲んでいたことを伺わしめるからである。

禪林における菊花茶は、呉茱萸が無いという日本の状況により生まれることになったのではないか。菊花茶は、大休正念など渡來僧によって開始されたものかもしれないが、結果として日本独自の禪林文化となったのである。

六 おわりに

重陽の上堂には、往々、茶に関連した説法が行なわれた。端午の菖蒲茶と同様、重陽の喫茶も一年に一度の珍しい行事であった。禪僧たちは、茶が印象的である日を選んで、茶に

関連する説法をしていたのであろう。中国での重陽の茱萸茶を受け継いで、日本でも重陽に茶を飲む禅林文化を継承したが、日本には呉茱萸の木は生えていなかった。それゆえに、菊花茶が生まれることになったのではないか。

臨済宗では一糸文守（一六〇八—一六四六）の『仏頂国師語録』（大正蔵八一・一八〇b）にも記録されており、茱萸茶の禅林文化は江戸前期まで伝えられていた。

中世曹洞宗における茱萸茶の受容状況は不明であるが、菊花茶については中世曹洞宗の語録にも見られ、中世撰述の清規には重陽の喫茶が記されている。曹洞宗の重陽の受容については、別の機会を設けたい。

中世禅林に導入された重陽の茱萸茶は、日本の禅林における重陽の喫茶文化を定着させ、あらたな菊花茶を生み出した。渡来僧や入宋僧による南宋禅林の再現、そして宋朝禅林を思慕する禅僧たちによる重陽の喫茶文化の受容と展開は、日本独自の禅が花開く過程を示しているように。

1 重陽については、中村喬「二〇一〇」中村裕一「二〇一〇」を参照。

2 茱萸茶は、陸游（一一二五—一二〇一）の「荊州歌」に「峽人住多楚人少、土鎔争餉茱萸茶」とあり、一例ではあるが民間の記録にも見られる。しかし、ここである「茱萸茶」は、土鎔（どなべ）を用いて煮て作られたようであり、あくまで荊州（湖北省）に伝わっていた茱萸を用いる独自の茶と理解する

他なく、禅林の「茱萸茶」とは別物と理解したい。

〈略号表〉

五山全 上村観光編『五山文学全集』思文閣出版、一九九二
五山新 玉村竹二編『五山文学新集』東京大学出版会、一九六七—一九八二

〈参考文献〉

中村喬『中国の年中行事』平凡社、一九八八
池田温『中国古代における重数節日に成立』中国古代史研究会編『中国古代史研究』六、研文出版、一九八九
安藤嘉則『中世禅宗文献の研究』国書刊行会、二〇〇〇
寺井泰明『「茱萸」と「ぐみ」』『日中言語文化 桜美林大学紀要』第六集、二〇〇八
中村裕一『中国古代の年中行事』第三冊、汲古書院、二〇一〇
館隆志『鎌倉期禅僧の喫茶史料集成ならびに訓註（上）』『花園大學国際禅学研究所論叢』第十二号、二〇一七a
館隆志『中世禅林における菖蒲茶』『印度学仏教学研究』第六六卷第一号、二〇一七b
館隆志『中世禅林における端午』『東アジア仏教学術論集』六、二〇一八

〈キーワード〉

中世禅林、禅文化、喫茶文化、重陽
（東洋大学東洋学研究所客員研究員・仏教学博士）